

巻頭言

リストラクチャ（再構築）

藤原 譲[†]

バブルがはじけて景気の低迷が長引いているが、計算機や通信システムのダウンサイジングの物理的要因もあって、組織や設備の再構築が“リストラ”の掛声がよく聞かれるようになって来た。またリクルート、共和、佐川、ゼネコンとたて続けに話題を賑わし、結局長期間にわたり政権を維持してきた自民党が野に下り、替わって革新系大合同の細川現体制が出来上がったので、これは政界のリストラである。

悪いことばかりがきっかけになるわけではなく、Jリーグの誕生で、サッカーは大きなブームを惹き起こし、10月28日対イラク戦で引き分けとなり勝てなかったので、世界選手権出場のチャンスは逃がしたものの、宿敵韓国に勝ったことも含め、見違えるような成長を示した。外人選手の導入も含め、リストラの効果といえる。

ところで、最近のJCICSに出たMarsの論文で、化学情報を共用し、再利用するために情報の蓄積、検索、操作の問題点を解決する方法として、概念の構造化が報告されている。これは純物質から位相、状態までもできるだけ基本的な概念で記述する方式をとっている。純物質そのものは元素と分子の部分構造によって表現する。

これは一般の概念を基本となる意味素の組み合わせで記述しようとする考えと類似のもので、基本となる概念の適切な集合をどのように設定するかで対象や利用法が限定されてしまうので、当初狙っていた標準とか、共用のためには不満足なものとなる。またこのような考えは数学的に扱い易く、システム構築は容易であるが、対象領域の僅かな変化や技術の進歩に対して不安定となるなどの欠点もある。したがって化学情報のモデルとしてはまだ大いに研究の余地がある。

いずれにしても、化合物の命名や化合物の特性の個別な記述だけでなく、化学情報全体の構造化を行うことによって化学情報の共用、活用を図ろうとすることは、これまで本格的に検討されていなかったので一石を投じた論文といえる。当研究会の反応分科会で行っている自己組織型の情報ベースは名称の通り、有機合成研究に必要な情報を自動的に構造化して、高度利用が可能となるシステムであり、その方向では我々の研究の方が一歩進んでいる。このような研究やシステム化が進み、化学情報のリストラとその成果を期する次第である。

[†]筑波大